光ガ丘中だより～光あふれて～　R８年度　７月号

評価・評定について

校　長　　井　川　勝　博

期末考査が終わり、多くの教科の採点結果が届いていることでしょう。

過去には、採点結果を返却するとすかさず「平均点は？」「最高点は？」という質問がとんできたものでした。当時は成績が「相対評価」というものだったため、学年で（クラスで）どれくらいの順位にいるのかが大きく影響していました。ですから、そのような質問は当然のものでした。ただ、現在の成績のつけ方は「絶対評価」「観点別評価」というものです。現在の定期考査で「平均点」などはあまり意味がないのです。今回はこの「評価」について簡単に述べていきます。

まず、いま行われている評価方法は、人と比較するもの（「相対評価」）ではありません。自分が、設定されている「基準」にどの程度達しているかどうか（「絶対評価」）です。評価は、主に「観点別評価」でおこなわれています。その観点は３つあります。①「知識・技能」②「思考・判断・表現」③「主体的に学習に取り組む態度」です。観点３つにそれぞれ「A」「B」「C」の評価が付きます。そしてその３つのアルファベットがどうであるかによって、評定「１～５」がつくことになります。簡単に言えば、「A」が多ければ高い評定になります。「AAA」なら「５」になることが一般的です。

それでは各観点のＡ・Ｂ・Ｃはどのようにつけられるのでしょうか。先日行われたテストで言うならば、ほとんどの教科で「この問題は観点①を評価する問題、これは観点②」となっています。それらのうち、観点①を評価する問題でおおむね８０％以上なら「A」（十分満足できる状況と判断）、おおむね５０％以上なら「B」（おおむね満足できる状況と判断）、おおむね５０％未満は「C」（努力を要する状況と判断）とされます。となると、１００点満点のうち、同じ８０点でも、観点①・②の評価が、○○さんは「AA」△△さんは「AB」だったということもありうることです。

評価は定期考査だけで出されるものではありません。それまでの小テストや単元テストであったり、教科によっては、学習の記録や問題集の取り組み状況が判断材料となっている場合もあります。授業中の発言回数ではなく、「どのような発表をしたのか」を判断材料にする場合もあります。実技教科ならば、実技の結果であったり作品の出来栄えであったりもするでしょう。

期末考査の点数ももちろん気になることでしょう。しかし、それ以上に大切なのは、「自分には何ができていて、次に何を伸ばせばよいのか」を知ることです。通知表には各観点の評価も示されます。結果だけを見るのではなく、自分の学びを振り返り、次につなげる材料として活用してほしいと思います。